
きっとその瞬間に

明日ナロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あいつとその瞬間に

【Zコード】

N4067Z

【作者名】

明日ナロ

【あらすじ】

なんだか知らないけど私異世界にきちゃいました！

そしてなんだか知らないけど話進んじゃってません？私抜きで！ふざけんなっ！

平凡な彼女が周囲の人々に影響を「えながらゆづくりと進む異世界物語。

けつこう主人公溺愛されでますが全然気付いておりません！

プロローグ

私は、じく普通の

一般家庭に生まれた。

父、母、兄が一人に私の五人家族である。

父、篠崎 賢之助は、まだまだ現役のサラリーマンだ。ちなみに部長。

母、篠崎 桃子は、専業主婦。

そして、社会人の上の兄に

大学四年の下の兄。

最後に今年大学生になつたばかりの私、
篠崎 透である。

あ。ちなみに

上の兄は篠崎 修斗

下の兄は篠崎 郁斗といつ

と。

ここまで

何処にでもいるよつた普通の家族だ。

しかしながら

うちの家族は一つだけ

異常な点が存在するのだ。

そう、まさに異常。

何が異常かといつと
それは、家族全員（私を除く）が大変見目麗しい顔をしていらっしゃるということ。

父、賢之助は

常に危険な色気がただよい眼鏡が最高に似合つ美人さん。

母、桃子は

グラマーなボディに

口リ口リな顔という危険な組み合わせの美女。

上の兄、修斗は

父の遺伝子を

色濃く引き継いだ美形。

下の兄、郁斗は

今どきの爽やか系イケメン。

そして、

どこのを間違つたのかふつーの顔で生まれてきた私。

きっと、これからずっと平凡な顔で美しい家族に振り回されつつも、
平凡な毎日を過ぐすものだと思つていた。

あの時、

あんなことが起るんですね。
まだ。

その日は朝からなにも変わったことのないふつーの一日だった。

朝6時に起床し、朝食を作り、超絶美形のつちの家族を起こして一階へ。なぜかうちの家族は、揃いも揃って低血圧だ。低血圧って美形のステータスなんだろうか。まあそんな感じで家族起床。

「おはよー。父さん母さん。」

「ん。」

「おはよー。透ちゃん」

父さんと母さんに挨拶をすると、短いながらも返事が返ってきたので安心した。ひどいときは、寝ながらご飯食べるからね……この人達。

と、やうにひじるひじるで後ろで重みが…

「郁兄ー? 透は今日も可憐ーーなあ。」

「んー? 透は今日も可憐ーーなあ。」

「修兄ーー! 郁兄じつにかしてーー!」

「修兄ーー! 郁兄じつにかしてーー!」

これでよ…

「郁斗、離れる。俺の番だ。」

何を言つてゐるのだ。ここには。そこから意味不明な喧嘩をし始めた二人を無視して、『飯を食べて学校へ。

そして、なんやかんやで帰宅。私は剣道部なのでいつもは遅くなるのだけれど、その日は休みで早く帰ることができた、ホクホクした気持ちで帰ってきた。

いや。帰らうとした。いつも道をたどつて最後の交差点にたどり着いたとき、それは起こつた。五歳くらいの男の子が、ボールを追つて道路に飛び出す。正確には、トラックの前へ。

あつーつと思つた時には体が動いていて、男の子を押し退けていた。田の前に迫るトラック。

周りの騒音。そのすべてがゆっくりに聞こえて、私は場違いに思つた。ああ…なんかこれが走馬灯つてやつかな?いや違うか。思い出しないし。じゃあなんて言つんだろ。これつて。

近づくトラックのライトが眩しくて田をぎゅつと瞑つた。最後に浮かんだ家族の顔にごめんねと囁いて、私の意識は真っ暗な闇に吸い込まれていった。

02 (前書き)

間違えがあったら指摘してくださいと嬉しいです。

暗く静かな闇の中で私は光を見ていた。その光の球体は、私の前に浮かんでいて、私はそれをただ見ていた。心の中で、早く立ち上がつて出口を探さないと、と考えていたけれど体が動かない。そして、置いてきてしまった家族のことを想つた。

父さんと母さんは今日帰つてくるの遅いよなあ。修兄と郁兄は、ご飯作れるのかなあ……確かに一人はなんでも出来るくせに料理だけは、下手だつたから今頃喧嘩してそうだ。みんなは朝起きられるかなあ。会社に遅刻したら大変なことになつちやう。

早く帰らなきや。早く早く。そう思つたらようやく立ち上がる氣力が湧いてきた。よしつー！と氣合を入れて立ち上がつてみる。足は、地面で擦れて怪我をしているかと思つたけど無傷だつた。まあ傷がないのにこしたことはない。このよくわからない空間から出なきや。

すると私の前でふわふわと浮かんでいた光る球体が、ゆっくりと動き始めた。まるでついてこいつて言つてているみたいだ。

まあ、何処にいけばいいか分からぬからついていくことにした。真つ暗な闇の中を小さな光を頼り歩く。不思議と恐怖はなかつた。そして、光が唐突に止まつた。

ここまで……いや……暗いままなんですけど。不審に思つて光に目をやると、言い訳がましく動いている。

……なんかやな予感がする。と思つた瞬間に光が弾けた。眩しくて目を瞑る。ああ、また意識を失うのか。さすがに一回目ならもうわかるだ！

でもこれで出られるかもしね。早く家族に会いたいな。

立て続けに考える頭の中で、囁く声を最後に意識を手離す。確かに私は声を聞いた。

ごめんね。でも特典は沢山つけたから。そちらへんは安心してね。

つらびつらひでじょうか？

03 (前書き)

今更だけど主人公がふわふわして定まりにくい… (T-T)

……おいつ……これは……

人の声。

あれ? 私帰れたのかな? それにしても五月蠅いな。

……なんで……召喚しなおせつ……

ん? ? 召喚? なんのことだ?

考えていたうちに、体が誰かに蹴られた。

「おい。起きる」

いてつ! 足でやつたな! ふざけんな! 衝撃によつてボヤけていた頭がクリアになつて、意識が戻つてきた。目をゆっくりと開くと、そこは見たこともない光景だつた。

……もう一回『絶しちゃおつかな。うふ。そうしよう。

再び目を瞑つるとすると、先程私を足で蹴つた人に、
「おい。起きる。王の前で無礼だぞ」

と言われたので仕方なく目を開けた。

……やつぱつおかしい。ここは何処なんだらつ。

まず人の様子からして違つ。見渡す限りの原色の頭。ピンク、金色、
青に赤。あ、オレンジまで。チカチカするな。

不思議と一番こいつは黒は見当たらない。昔から色素の薄い、私の髪と同じ茶色も一人もいなかつた。

そして、服装もどこの映画ですかってくらい違つた。よくあるおとぎ話の舞踏会みたいな格好。

私のような、純粹な日本人では到底着こなせないけど、ここにいる人達は、みんな西洋風の顔立ちをしているので、違和感はあまり感じられない。

あれ？ ていうかさつきの人、王がなんぢやうつて言つてたような。じゃあここは王宮つて訳か。

へー。王宮ね。

ほー…………つて！

ダメじやん！ 一番厄介だ！ なんか巫女とか呼んだのかな？ 無理無理無理無理！

私はどうひじきめにみてもTHE平凡だし、特殊能力とかないし。どうしよう！ 殺される… よくて豚の餌とかだ。あーつもうー運なさ過ぎー家に帰りたいだけなのに！

私はまともらない考え方のなかで一つの解決策を導き出した。それは、絶対に逆らわないようにして、なんとかこの場を乗り切り、とりあえずこの厄介な場面を回避する。というものだ。なんとかなる。よし平常心、平常心…。

「王。どうされますか？」

そんなときまた声が聞こえる。

今喋ったのは、先程私を蹴った金髪の人の隣にいる、青に少し黒を混ぜたような髪の色の人だ。

王って…あれ？あの真ん中の人か？髪が真っ黒だ。
にしても凄い美形だな。王様っていう割りには若いな。私は耐性があるけど、馴れてない人が見たら、倒れそうだ。

そんな美形の王を観察してたら、今まで黙っていた王が一言言い放つた。

「つまらん。殺せ」

…え

「私も同意見です。早く連れていきなさい。田障りです」

…は？

「しかしつ一もつ一度召喚する」とは困難です」

「別にかまわん。早くしろ」

そのとき、さつきまで立てた私の『THE平凡人間生き残り計画』が音をたてて崩れさつた。

かわりに心の何処かで、何かが切れるのを感じた。燃えるような体

で立ち上がる。そして、王様のもとへゆっくりと歩きだした。異変に気がついたらしい周りの兵らしき人達が、私の前に立ちふさがつた。感情に任せて一言だけ言ひ。

「じきなさい」

兵が強張った顔で、後ろに下がつた。そこを進む。

王様の前まできた私は、真つ直ぐに王様を見て口を開いた。

「ねえ？説明してくださいますか？」

まるで、出来の悪い子供に言い聞かせるように微笑んでみせた。

04 - 王様視点です！ - (前書き)

王様視点です！

面倒だ。なぜ俺がこんな面倒なことを。

目の前に座り込む少女を見て、俺はただそう思った。

アルメタニア王国。この国には国の繁栄を願つて異世界から人を、人間の女を召喚するという習わしがある。

なぜ国の繁栄が、異世界の人間と繋がるかといつて、以前やって来た人間が様々な知恵を授けたとされているから。

そつして呼ばれた女は、側妃または、王妃になる。

冒頭に戻るが、今俺の目の前にいるのは、小さくてどこか頼りな少女性だ。

この国では珍しい、茶色の肩につくべらじの髪は、ふわふわしている。

瞳の色も髪と同じ茶色。顔立ちは普通だ。目立つのは、髪と瞳だけで、肌は白いが他に特徴も見当たらない。この程度なら何処にでもいる。しかも、どことなく影が薄い。明日には忘れてしまいそうな顔だ。

一言も喋らないこいつはもしかしたらそいつが馬鹿なのかもしれない。

つまらん。

ただのガキじゃないか。子供はこの国には必要ない。

また違う人間を召喚するだけだ。もし、駄目なら異世界からきた者など妃にしなければいい。必要なのは、役に立つ人間だ。

俺は気持ちのままに殺せと命令した。そして、隣の側近に手をやり退出を促す。そうして、最後の挨拶を述べようとしたときそれは起つた。

少女がゆっくりと立ち上がって、一いち方に向かってきたのだ。

兵士たちがすぐさま少女を取り囲む。少女は一言だけ言った。

「どうなさい」

よく通る声に威圧感を滲ませて。兵士たちは、驚き少女の為に道をあけた。

少女が目の前にやって来る。先程の平凡な空気を纏っていた少女は、妖艶な笑みを浮かべていた。

どうして、さつきはわからなかつたのだろうか。

少女はよく見ると整つた顔立ちをしていた。茶色の瞳はガラス玉のように透き通つて、色の白い顔にバランスよく配置されている。唇は桜色。

何処かうぬぼれても、美少女だ。

そして先程までとは違い、まるで大人の女のよつやかな空気を纏っている。

そう、少女は美しかった。意思の強い目が真っ直ぐにこちらに向か
られたとき俺は思った。

ここが欲しい。

きっとここは役に立つ。

04 - 王様 side - (後書き)

王様はまだまだ恋に落ちてしませんよ～

利用する気満々です(笑)

05 (前書き)

お気に入り登録ありがとうございます！

精一杯頑張ります (*^。o^*)

「説明してくださいますか?」

「一少「コリ笑つて言つたその言葉に、王様がこりりて視線をよこした。

王様の周りの人達は、何故か顔を赤くしていたが、王様だけは表情を変えず、目を少しだけ細めた。

「説明とは?」

「私が何故ここにいるのかと、何故私が殺されなければならぬかといふことです」

また王様を真つ直ぐに見て言つてのけると、黒髪の美形は、大層楽しそうな目をして答えた。

「何故かとは…面白いことを言つた。まあ答えてやろう。まず、お前をここへ召喚したのは、私の妃にするためだ。そして、何故殺されるかといふのは、私がお前を必要としていないからだ」

その言葉はあまりにも理不尽過ぎた。人生でこんなにも憤慨したことはないだらうといつほど体が熱い。

逆に頭はどんどん冷えてきて、その勢いのまま私は笑顔を捨てて、王様に告げた。

「私の価値を決めるのは、貴方ではありません。今、ここで私の命を奪うといふことは、私の人生を貴方が奪うことと同じこと…もし、

そんなことが許されるなら、私が貴方の人生を決める！貴方はクズだ。誰かの人生を、生きている時間を、たった一言で終わらせるなんて！！」

言つてから気付いたけど、この人王様だった。

まあ知つてたけどね…あーあ…短い人生だったな。

どうしてか、不思議と後悔はなかつた。静かに死を受け入れる。

コツコツと足音をたて近づいてくる王様を見ても恐怖は湧いてこなかつた。

けれどその腰にある剣を見ると痛そうだな、と思つ。皿をギュッと瞑つた。

ごめんね。みんな。帰れなくて。最後に家族に別れを告げた。

足音が止まつた。

悲しまないで。

私は幸せだったから。

さよなら。大好きな家族。

体が浮かんだ。

ん？体が浮かんだ？ていうか担がれてる？なんでっ――！

感傷に浸る暇もなく私は何故か王様に担がれています。

・
・
・
・
・ なんで？

06 (前書き)

お気に入り登録本当に嬉しいです！！！頑張ります（^ー^）▽

死の覚悟から一転して、私は何故かまだ王様に担がれたままです。

あれー??おかしいな?殺されるかと思ったのに・・・
なんだこの状況?
てか重くないのか王様よ。

なんて場違いなことを考えながら周りを見渡すと、貴族なのかな?
豪勢な服を着た人達が、酷く驚いた顔でこちらを見ていた。

そりやね、さっきまで暴言吐いた奴を殺すならまだしも、抱き上げ
たのだから驚くのも当然か。

うーん…どうしましょう。

私がそんなことを考えているうちに王様が歩き出す。そして、大きな扉の前に立つと、これまたよく通る声で、未だ動けずにいる人々のほうを向き、言い放つた。

「この異世界より舞い降りし麗しの乙女を我が妃にする。以上だ。
私は退室する」

担がれたままの私は思つた。乙女って・・・なんじゃそりや。て
か妃にする?妃つてこの人と結婚するつてこと?

え――――――!?

何がどうしたらやうなるんだ!

「あの～すいません」

「黙つてろ。今詠唱を済ませる」

エイショウ？ なんだそれ？ もう何がなんだか… 肝心のことは何も聞けないし。黙つてろで瞬殺されたよ… もう泣いていいかな？

そういうしている内に、王様が、何か呪文の様なものを唱えだした。それが止まつたと思ったら、私達は光に包まれた。

次に目を開けたとき私は豪華な、いかにも金持ちの部屋です、みたいなところにいた。

瞬間移動したみたいだ。感心していると、ようやく王様に下ろされる。

あ… そういうえば、担がれたまんまだつたな。

とにかく聞きたいことは山ほどある。王様は私よりも背が随分高いので、顔を精一杯あげて、なんとか視線を合わせた。

「あの王様？ 私」

「王が名前ではない。俺の名前は、ルーズベルト・ガードル・サン・アルメタニアだ」

またエイショウつてやつかな… アハハ… 名前長すぎだろーー！

「えっと…ルーズベルト…ガールメタニア?」
・・・・・・・はあ。

あ!今溜め息ついたな!だつて長くて覚えにくいいから…馬鹿にしゃがつて!

「ルーズベルトでいい。お前の名は?」

「篠崎 透ですけど…」

「シノザキトオルでいいのか?」

「あ…透が名前です。篠崎はファミリーネームなので

「ではトオル。早速だが俺と結婚しろ」

まさかの命令系!
おこおこ…。

出会い系ですぐの王様もといルーズベルトから突き付けられたのは、
女の子なら誰だって憧れるプロポーズなるものでした。

ラブが少ないです
次こそは！

たぶん「ここは異世界と呼ばれる場所だと思う。きっとそれは間違つてない。

けれど19年間生きてきて、異世界なんてところに来てしまつただけでも驚愕の出来事なのに、今私は倒れそうだ。

先程私を殺そうとした人から、今プロポーズをされている。意味が分からぬ。

「あの王様」

「ルーズベルトだ」

うう… さっきも言われたんだつた。

――すべると様?」

好色なもんの囁く

「まあいいや。」
「どうか、この人だけに名前にこだわるな。何でだ？」

好きなどう言へり語へたし

一
で
ではベルさん！」

あ！手で顔を隠した。
イヤだつたのか？

「駄目ですか？」

「いや…それでいい」

なんだつたんだ？まあいいや。

私は疑問を胸に押し込んで、王様を見上げた。

「ベルさん。私は自分を殺そうとした人と結婚するつもりはありません。私を元いた世界に返して下さい」

当然だつた。私は殺されると本気で思ったのだ。あんな恐怖を味わうはもうじめんだし、殺されないなら家に帰りたい。

けれど、田の前の黒髪の人はぐつと眉をしかめた。

「それはできない。お前を召喚するときにこの国の半分の魔力を使つた。つまり、お前をもといた世界に返すときこの国は滅びる。俺は王としてこの国を守らなければならぬ」

この国が滅びる？そんなこと私には関係ない。どす黒い気持ちが私を蝕む。

「しかしそれを無視してお前を帰そうとすることは不可能ではない、が、術式が完成するのにあと一年はかかるだろう」

「一年・・・短くはない時間だ。泣いては駄目だ。私は人前では泣きたくない。

「お前が帰る為の術式を作るよつ命じる。一年だ。まず一年間俺の妃でいてくれ。俺は、お前をこの世界の全ての物から守ると約束しよ」

真つ直ぐに此方を見ていた。この世界で初めて出会つた懐かしい黒髪の人。恐ろしい程の美形は見馴れているはずなのに。上手く反応できない。

「ここの國の王としてではなく、俺自身の意見を言わせてもらうと、俺はお前を帰したくない。だから俺はお前を落としてみせる

そう言ってベルさんは初めて笑つた。非常に恐ろしい笑顔で。何て言うか色気だだ漏れ？

「一年後、お前がまだ帰りたいと言つのならば、俺はお前を帰してやる。例えこの国が滅びることになつてもだ。約束しよう。まあそんなどは絶対に有り得ないが」

凄い自信だ。けれどこの人はきっと約束を破らない。何故だかそう思つた。

「信じます。貴方を。一年間よろしくお願ひします」

誠意には誠意で返す。この人は、國をかけた。私は一年という歳月をかけよう。この勝負絶対に勝つてみせる。

私は微笑んでみせた。今はただ感傷的にならないよつこ。

目の前の美しい人は、一瞬驚いた顔をして、直ぐに無表情に戻つた。

「ああ。では、ここはお前の部屋になる。それから一応この國の王

妃になるのだから、それ相応の教育が必要だ。また明日詳しいことを説明するから今日は休め。隣は寝室になつていて。何かあつたらその呼び鈴を鳴らせ。では俺は仕事に戻る」

そういつてベルさんは、部屋を出でていった。

言われた通り隣の部屋にはとても大きなベッドがあった。そこには寝転がり色々なことを考える。

王妃なんて厄介そうなものを引き受けてしまった。

けれど利用できるものはなんでも利用したい。

私は自分の中にこんなにも打算的な部分があることに驚かつて、田を瞑つた。

みんな私は絶対に帰るよ。

待つて。

この時の私は気付いていなかった。自分がこの世界に飛ばされる前に轢かれそうだったことも。国が滅びるということがどうこうことを指すのかも。

皆様のお陰で1万アクセス達成しました(*^o^*)

これからもよろしくお願ひします!!

色々考えていたら、いつの間にか眠っていたらしい。
朝が来ていた。

あー、」飯ー、皆を起しにしないと。

急いで飛び起きて気付く。ふかふかな大きなベッド。広くて豪華な
部屋。

そつか、ここ異世界だった。

ふとした拍子にどうしようもない気持ちが溢れてしまひで、急いで
蓋をする。

今は前だけを見なけば。

大きく息を吸つて吐く。

大丈夫。きっと大丈夫だ。

根拠なんて要らなかつた。

今は自分を奮い立たせる時だ。

勢いをつけてベッドから飛び起きる。

さて、どうしようか。

まずはお風呂に入りたいな。何だかんだで昨日は入れなくて体が気
持ち悪い。平凡な私だけど、これでも一応性別は女なので体がベタ
ベタするのは嫌だ。

「…お風呂あるのかな？」

「…取り敢えず探しに行こう。」

もう思つて立ち上がつたとき、扉が音を立てて開いた。

「「おはようございます。王妃様」」

可愛らしいメイドさんがいた。それも三人も。なんで？

「あの…おはようございます。何がご用ですか？」

「私どもは王の命によつ、王妃様のお世話をすむよつつかつておつまわ」

そう可愛らしい笑顔で真ん中のメイドさんが言つ。
ちなみに真ん中のメイドさんは、ふわふわボブの金髪に青色の目。
可憐な美人さん。

右のメイドさんは、薄い緑の髪で同じ緑の目をした癒し系美人さん。
左のメイドさんは、真つ直ぐな青色の髪に灰色の目のクール系美人さんだ。

凄いカラフルだなあ。

しかも皆美形だ。見馴れているとはいへ…この国は美形率が高いのか？

「王妃様はこれから陛下と」食事と聞いております。私どもはその準備のお手伝いをさせて頂きますわ」

「えつ…食事？聞いてな…ちょ、ちょっと…」

「では参りましょ」

可愛いいい外見からは想像もつかない力で、お風呂場みたいな所に連れていかれる。

「ちよつ！ 一人で入れますから！」

「あら？ 駄目ですか、私たちの仕事を奪われては」

そして今、私はグッタリしたまま、薄いピンクのドレスを着せられ、化粧をされてる真っ最中。周りには、非常に楽しそうなメイドさんが三人。

もう一生分の力を使つたよ。お風呂恐い。

「トオル様はお肌が白くていらっしゃるので、羨ましいですわ！」

「ええーほりー！髪もこんなに艶々でー！」うつて編み込んで残った髪をいじつすると・・・キヤーーーーーー可愛いらしくですわー！」

「ほんとにーお化粧がはえますわねー！」

楽しそうだな・・・

あ、終わつたみたいだ。

「トオル様。ありがと「うー」ほこました。とても楽しませて頂きましたわ！」

頬を上氣させて金髪のメイドさん——ラナが言つ。先程名前を聞いたところ、金髪の方がラナ、緑の髪の方がシーナ、青の髪の方がメリーといひしき。みんな年は十七歳だそうで。

初めはさん付けで呼んでいたのだけれど、

「私どもに敬称など要りませんーお止めくださいー！」

と、猛反発を喰らつたので名前は呼び捨てにしてくる。

ついでに私の堅苦しい『トオル様』つていうのも改めて欲しいところだけれど、『王妃様』つていうのを名前にしただけでも限界らしいから、そこには諦めるしかないみたいだ。

かくして、ピンクのドレスを着せられた私は今鏡の前にいる。淡いピンク色で下の方にかけて徐々に紫色に変わつていくドレスは文句なしに可愛らしい。

しかし、
だ。

私の平凡かつ童顔な顔でもこれはない。 仮にも十九の女にこれは駄目だろう。

私が今着ているドレスは、可憐らしさが全面にでている、つまり子様用ドレスだった。

「ねえ、みんな？ 私何歳くらいだと思ってる？」

「「十三歳ですわ」」

やはり勘違いしていたか。それにしても今までにない数字だなあ。
一応訂正しておくか…

「あの、私、十九歳なんだけど……」

「『アーリー』」

凄い驚かれようだ。

余程幼く見えていたらしい。

「私どもよつも年上でこりゃ こまですか?」

「まあ一応…」

「申し訳ありませんー私でつきつ…」

「……ここよ。よく間違えられるし…まあ十二歳は初めてだけ
で」

「それにしても十九歳でその可憐なことは犯罪ですか」

「もうですね。ドレスもよくお似合こどす」

似合つてない。似合つてない。化粧でなんとか誤魔化してゐるナビ、
THE平凡の私にはキツイよ。

「あの、ドレスのことになんだけど。かよつとやつ過ぎじゃなー?」

あつとみんな流石に言こ出せないと思つから自分で言わないとな。
これは本当に可愛らしき人が着るものだ。ドレスをもう少し地味な
ものに変えて貰つて…
「いいえー本当に良くお似合いですー。」

「トオル様の白い肌に良く映えますわ」

「あらーーもういそな時間ーでは壁とのもとへ参つましょー

えつ変えてくれないので?

ちよつ・・えーーー!

慌てる私をまたまた光が包み込む。これ例のハイショウのやつだ。

そう思った瞬間に景色が変わった。

お話を進みません…

進めーー!!

はい。いよいよ!!

一瞬で変わった景色に驚く暇もなく、今までに私はベルさんは一度田の対面を果たしていた。

そしてそのベルさんはといふと…何故か硬直している。

おーい？ベルセーん？

どうしてこうなったかといふと
大きな扉の前に瞬間移動した私の隣にいつの間にかいたラナが、

「王妃様をお連れいたしました」

と詰つと中から、

「入れ」

と声が聞こえ、扉が開いた。

部屋の中にはベルさんがいて、朝食が用意されていた。美味しいそつ
な匂いが鼻をくすぐる。

お腹へつた。そういえば昨日から何も口にしていない。入れつて言
われたけど…誰に言つたんだろ？そう思案していると、

「どうした。入つてこい。トオル」

と名指しで呼ばれたので

「失礼します」

と言つて室内に足を踏み入れる。

そして話は冒頭に戻るのだけれど。

依然固まつたままのベルさんが私の前にいる。

扉が完全に閉まって室内には私とベルさんしか居ないので、思い切つて声をかけた。「ご飯が冷めちゃうし。

「あの…ベルさん?」

一瞬顔が強張つたみたいだけれどたぶん見間違えた。次の瞬間には無表情に戻つていたし。

よつやく固まつたままのベルさんを元に戻して、一緒に朝食をとる。パンはふわふわ。スープはポタージュみたいな味がしてとても美味しい。

暫く夢中で食べていると、前から視線を感じる。見られてるよね…? ビーッショウ…食い意地張つてると思われた?

ちつ…違うんです!普段はこんなに食べないんです!

あーー恥ずかし過ぎて泣きそうだ。赤くなつた顔に気付かれたくな

くて、俯く。

すると、視界の端で手が動くのが見えた。
ベルさんが私のお皿にパンを置いていた。

「俺の分も食べろ」

なんていふか…

この態度との間に見覚えがある。

私だつて十九年間この童顔で生きてきたのだ。

もとの世界でも、中学生のとき、公園で人を待つていただけなのに、
知らないお爺ちゃんにお菓子を沢山貰つた覚えがある。たしかその
時、

「お使い偉いね」

などと言われて、ショックを受けた。どうやらお爺ちゃんには私が
小学生に見えたらしいかった。かりにも受験を控えた中学三年生だつ
たのに。

高校のとき、好きだった人に、

「篠崎は妹みたいだな」

つて言われて、一日間泣き通した記憶がある。彼の中では、私は恋愛対象ですらなかったみたいだ。告白しなくて良かった。

まあその他にも色々な『童顔武勇伝』はあるけれど、様々な経験をしてきた私だからこそ、この田には見覚えがある。

この田は小動物や子供を慈しむときの田だ。つまりは……

「あのベルさん。私って何歳に見えますか？」

「十三歳ぐらいじゃないのか」

「デジャブだ。本日一度田の訂正をしなければ。どうしてここの人達は……」

「私、十九歳なんです」

信じられないという顔をしたベルさん。いえいえ…本当ですから。

「では成人しているということか」

「私の世界では成人は二十歳からですか、まだですけど。一九九〇年の成人は何歳からなんですか？」

「十五歳だ」

「十五歳！？じゃあ私成人してますね」

「ああ。良かつた」

良かつた？なにが良かつたんだろう。
まあいいや。他に気になることもあるし。

「あのベルさん。どうして私をここに呼んだんですか？」

「お前と一緒に朝食をとったかった」

「…不意打ちだ。顔がまたあつくなる。だから美形は嫌いだ。

「あ…あのベルさん…のですね…」

「冗談だ」

クスクス笑われて、からかわれたと気付いた。

「ベルさん。正直に言つてください」

「気分が悪いぞ。私は。

いくら平凡でも、からかわれるのは嫌だ。

「半分本気なんだが…まあいい。実は、一週間後にお前と俺の婚礼が行われる。その際お前には、きちんととした振る舞いをして貰らわなければならぬ。そこで今日からマナーとこの国の歴史を学んで

…まあ頑張ります！

10-王様 side - (前書き)

更新遅れて、ごめんなさい。王様ターンです。次回もそういうふうです！

それでせばなんとん良いお年を！

出会つてまだ一日しかたつていない。それでもコイツに対する興味は死きない。それは不思議であつたが不快ではなかつた。

異世界からきた少女の名前はトオル・シノザキと言つた。この国では馴染みのない響きで、彼女が本当に異世界から来たのだとわかる。

此方の世界には唯一黒髪をもつ王族の中でも例を見ない、茶色の髪。同色の瞳は雄弁に彼女の感情を伝えてくる。

しかし、あの謁見の場を支配した同じ人物とは思えない程、今は何処にでもいる少女だ。下手すればそちらの村娘に紛れてしまいそうな。

それでも、一緒に空間について嫌悪感がない女は久しぶりで、やはり王妃にはこの少女がいい。俺の直感がそう言つた。

容姿や家柄など関係ない。この婚姻には愛など必要はないのだから。

俺はもう一度と誰かを愛する」となどない。

その点コイツは絶対に俺を好きにはならない。何故ならばコイツにとつて俺は、この世界に召喚した張本人で憎むべき相手だから。

だから、コイツは都合がいい。

愛情など求めない存在のほうが楽だ。

何より、俺は権力に擦りよる女には虫酸がはしる。
故にこの世界の女よりも権力に馴染みのない少女のほうが、何かと都合がいい。

おまけにコイツは面白い。

俺のことを敬称も付けず『ベルさん』と呼んだときには、柄にもなく吹き出しそうになつて慌てて顔を隠してしまつた。

皆が恐れて見ない俺の瞳を、真つ直ぐに見上げてくるのも好ましい。
他とは違つ茶色の瞳で見上げられるのは悪い気はしない。

そんな杞憂な存在を前にして妃にしないほうがおかしい。

だから瞳をついた。「コイツをこの世界に引き留めたくて。

確かに、もとの世界に帰すにはこの国の半分の魔力を要する。しかし、それは、俺自身の魔力を含めなかつた場合だ。俺自身の魔力を入れると、人一人帰すことなど容易い。

目的の為には、手段は選ばない。少女がいくら泣いても止めるつもりは無かつた。

だから

「貴方を信じます」

と言われたとき耳を疑つた。その瞳には悲觀する色はなく、ただ確かな決意の色があるだけだつた。やはり面白い。

もう俺はコイツを、トオルを逃がすことなどない。

必ず落としてみせる。

そつ心に決めた。

少女を部屋に残し自室へ戻る。そこには、この国の宰相と將軍がいた。

まあ説明もしていなかつたから当然だろつ。非常に疲れた表情をしている。

面倒くさい。

無視して寝室へこいつると、將軍レオンに止められる。

宰相のほうはといふと、俺に何か言つてもつは無れやうだ。大抵レオンが引っ張つてきたのだらう。

「おい……説明して貰うやがれ」

「何が聞きたい」わかつていて問いかける。

「なにがじやねーよつ！お前さあ、異世界から来たやつは妃にしないつて言つてたじやねーかつ！だからお前があの娘を連れていったとき、自分の娘を妃にうて言つてた貴族達を宥めるの大変だつたんだぞ！」

「それがお前達の仕事だろつ」

「ちげーよつ！つたく…なあ、ルーズベルト。お前まさかあの娘を妃にとか言わねえよな？」

「そのつもつだが

「んなつ…何でだよーお前はまだつ…」

「レオン。言こ過ぎです」

「あつ…ああ…・・・悪かった」

俺の殺氣に気がついた宰相ライナードが止めた。

ライナードが止めていなかつたら、間違いなく斬つていた。

それが分かつたから、いつも口を挟まないコイツも言わざる終えなかつたのだろう。

すると今度はそれまで黙つていたライナードが口を開いた。

「私はあの娘を妃にするのは賛成です」

「つな…・・・なんでだよつ」

「レオン。貴方もみたでしょ。彼女は王妃に相応しい器です」

「確かにっ！あの娘は最初は平凡かと思つたけど違つた…けどおれは納得できねーよつ！なんであの娘なんだつ」

レオンが悲痛な声をあげる。そこに見え隠れする少しの同情が疎ましい。

「納得してもらわなくて結構だ。これは決定事項で覆ることなどない。もう下がれ。お前達と話すことなどない」

威圧感を添えてそう言つと流石のレオンも口をとじ、ライナードと共に退出の礼をとり出でていった。

一人になった部屋で、イスに寝転ぶ。目を閉じると浮かぶのは金髪に翠の瞳の少女。

先程のレオンの言葉が頭にこだまする。

…………ああ。わかっている。俺は今でもお前を。シーナを愛している。

朧気な彼女との記憶に想いを馳せながら俺は眠りについた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4067z/>

きっとその瞬間に

2011年12月31日21時45分発行